



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

臨床心理学をまなぶ 7 量的研究法

南風原朝和

はじめて研究に着手する学生さんや実践を専門とする方から、「知りたいことはあるが、どうやって研究のかたちにしたらよいかわからない」という相談を受けることがあります。また、ある程度、研究経験を積んでこられた方から、「研究アプローチが固定化してしまっただけで発展性がない」という悩みを聞くこともあります。

本書の中心となる第Ⅱ部「研究立案のためのガイド」では、これらの問題の解消のために、「この視点から問題を整理してみたらどうか」「この問いを加えてみては

どうか」「この角度からデータをとってみるのはどうか」といった具体的なガイドを提供しています。

第Ⅰ部「量的研究を始める前に」では、研究の具体的なイメージと目標をつかんでいただくために、第一線の研究の実際例を紹介し、デザイン上、どのような点がすぐれているかについて解説しました。

最後の第Ⅲ部「データ分析の方法」では、第Ⅱ部のガイドごとに、関連する分析法を示しました。

本書が、臨床心理学をはじめとする心理学の諸領域で、研究の手助けになれば幸いです。



著 南風原朝和
発行 東京大学出版会
A5判 / 240頁
定価 本体 2,600円 + 税
発行年月 2011年11月

はえばら ともかず
東京大学大学院教育学研究科教授。専門は心理統計学、心理学研究法。著書はほかに、『心理統計学の基礎：統合的理解のために』（単著、有斐閣）、『心理統計学ワークブック：理解の確認と深化のために』（共著、有斐閣）、『心理学研究法入門：調査・実験から実践まで』（共編著、東京大学出版会）、『行動科学における統計解析法』（共著、東京大学出版会）など。

伝えるための心理統計

効果量・信頼区間・検定力

大久保街亜

本書では「心理学における統計改革」と呼ばれる新しい流れを理論と実践の双方から紹介しました。

$p < .05$ なら論文が書ける。そうでなければ書けない。帰無仮説検定の枠組みでのみ考えるなら、そうなります。だからこそ、有意差が出て飛び上がって喜んだり、出ずに落胆したりするのでしょうか。誰もがこんな体験をお持ちだと思います。

しかし、このような帰無仮説検定への過度な依存に変化が出てきました。これが心理学における統計改革です。改革の流れを受け、

効果量や信頼区間を算出し、差の大きさや関連の強さを吟味することが最近では重視されています。また、計画段階で検定力分析を行い、適切な例数設計を行うことも推奨されています。この流れを踏まえずに論文を書くのは、近ごろ難しくなりました。すなわち、帰無仮説検定だけに依存した分析だけでは不十分とされるのが現状です。

適切にデータを分析し、読者に情報を伝えるため、心理学における統計改革は行われています。本書が、適切に情報を「伝えるための」一助になれば幸いです。



著 大久保街亜・岡田謙介
発行 勁草書房
A5判 / 228頁
定価 本体 2,800円 + 税
発行年月 2012年1月

おおくぼ まちあ
専修大学人間科学部准教授。専門は認知心理学。著書はほかに、『認知心理学：知のアーキテクチャを探る 新版』（共著、有斐閣）、『言葉は身振りから進化した：進化心理学が探る言語の起源』（訳、勁草書房）など。



編著 梶田叡一・溝上慎一
発行 世界思想社
四六判 / 280 頁
定価 本体 2,300 円 + 税
発行年月 2012 年 2 月

かじた えいいち

兵庫教育大学名誉教授、聖ウルスラ学院理事長。専門は自己意識心理学、教育心理学。著書はほかに、『自己意識の心理学』（単著、東京大学出版会）、『意識としての自己：自己意識研究序説』（単著、金子書房）、『自己を生きるという意識：「我的世界」と実存的自己意識』（単著、金子書房）など。

自己の心理学を学ぶ人のために

梶田叡一

人は誰しも、自分自身に強い関心を持っている。そして、自分は他の人からどのように見られているか、自分についての意識の持ち方が自分の言動や対人関係や生き方にどのように影響しているか、時と場を超えて「これこそ私」と言えるものはあるのか、等々の問題にこだわらざるを得ない。本書はこうした問題について、社会心理学、人格心理学、認知心理学、発達心理学、青年心理学、臨床心理学の立場から、確かな典拠と新たな知見に基づき論じたものである。日本の研究者についても北山

忍の研究が、また南博、河合隼雄、小此木啓吾、水島恵一の理論が取り上げられている。学生や院生のための入門書であると同時に、この分野の研究者にとっても現段階での概観を与えるものと自負している。30年にわたって大阪大学や京都大学等を会場に続けられてきた自己意識研究会の最新の成果とも言えよう。執筆者は、金川智恵、森岡正芳、杉村和美、板倉昭二、佐藤徳、中間玲子、堀内孝、小松孝至、杉浦健、内田由紀子、家島明彦と両編者であり、全体の取り纏めは溝上慎一が行った。



監修 金児曉嗣
編著 金児曉嗣・松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良
発行 ナカニシヤ出版
A5 版 / 256 頁
定価 本体 3,400 円 + 税
発行年月 2011 年 10 月

かねこ さとる

相愛学園理事長・相愛大学学長。専門は社会心理学、宗教心理学。著書はほかに、『日本人の宗教性：オカゲとタタリ』の社会心理学』（単著、新曜社）、『サイコロジー事始め』（編著、有斐閣）、『文化行動の社会心理学』（共編著、北大路書房）、『真さんと日本人：映画「男はつらいよ」の社会心理』（共編著、知泉書館）、『真宗信仰と民俗信仰』（単著、永田文昌堂）など。

宗教心理学概論

金児曉嗣

2003年の夏、日本における宗教心理学的研究の活性化をめざして、宗教心理学研究会が発足した。本書は、この研究会のメンバーのうち、主として社会心理学、発達心理学、老年学の観点から宗教現象へアプローチする研究者により執筆されたものであるが、わが国で実証科学の名に値する「宗教心理学」の本が出版されるのは、実に60数年ぶりのことである。

近年、アメリカで急増しつつある「宗教心理学」の知見を概観し、併せてわが国でも20世紀初頭から現代に至るまで、地道に蓄積さ

れてきた関連業績を年代順に位置づけ紹介した。「概論」と名づけた所以である。それだけでなく、「宗教とスピリチュアリティ」「生涯発達と宗教」「宗教と死」など、今日の問題を各章に配してオリジナルな主張を盛り込んだ。また、近年関心を集めているトピックスを選び、そのトピックスを専門的に研究している研究者に執筆を依頼した。わが国における実証的な宗教心理学研究を詳細にレビューした内容となっているので、宗教現象に関心をもっている人にはぜひ手にとっていただきたい1冊である。